

国際バカロレア教育導入・実践の歩み  
—国内固有の課題に即して—  
Primary Years Programme (PYP) 編

令和7年3月

作成：文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム

※本資料は、令和6年度文部科学省委託事業「国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業」により作成したものです。

※本資料の内容は、執筆者である IB 教育アドバイザーの視点に基づき、執筆時点ならびに事例発生当時に得られた情報をもとに作成しています。そのため、現行の規定や運用と相違が生じている場合があります。最新情報については、必ず国際バカロレア機構の公式資料または国際バカロレア機構の職員に御確認ください。

## 国際バカロレア教育導入・実践の歩み（目次）

第1章 認定までのプロセス

第2章 費用

第3章 コーディネーターおよび教員の育成

第4章 カリキュラム編成

第5章 学内外コミュニティとの連携

第6章 PYP の評価

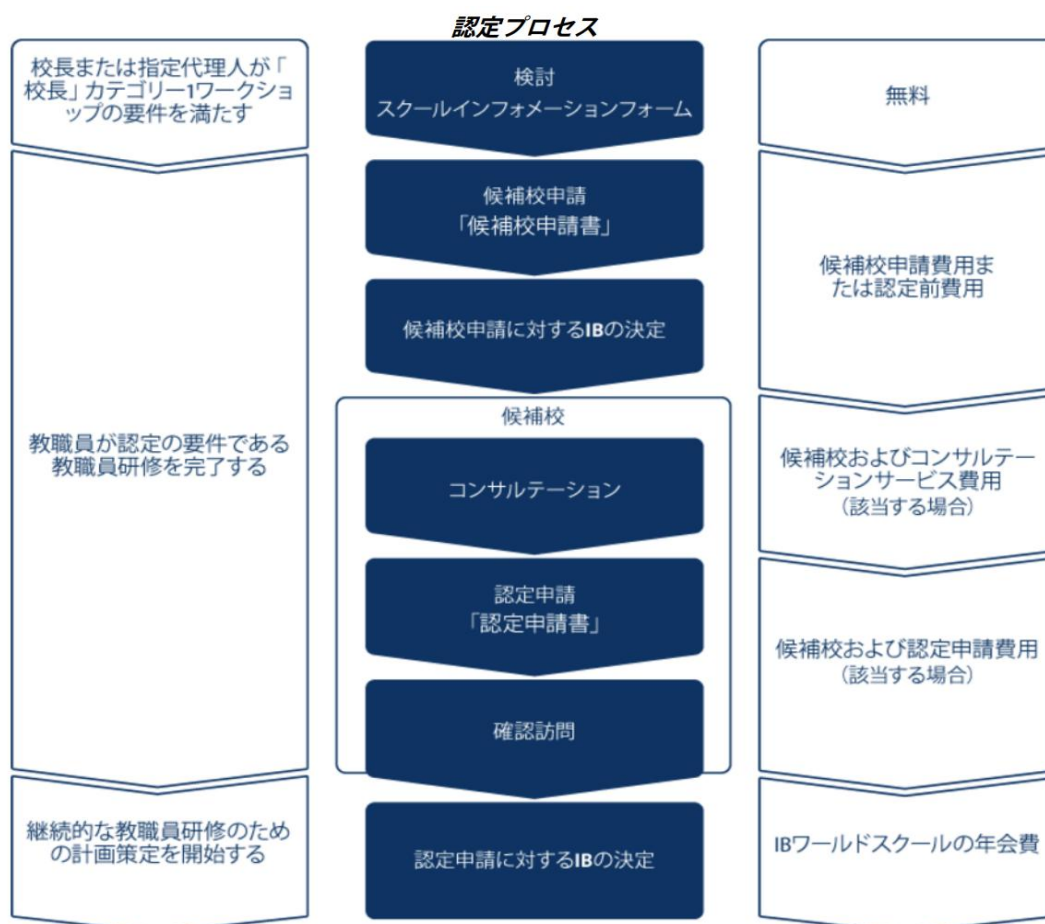
第7章 認定後に必要なこと

第8章 情報収集の仕方

第9章 リソース・参考文献

## 第1章 認定までのプロセス

本章では、Primary Years Programme (PYP) に認定されるまでのプロセスを記載しています。認定を目指す場合は、必ず IBO の公式資料を確認してください。以下の図は、『学校のための認定ガイド』（2022年3月発行の英語原本『Guide to school authorization』の日本語版 2022年12月発行）2ページに記載されている認定プロセスのモデル図です。このプロセスに沿って、認定取得に向けて手続を進めます。



### 1-1. はじめに

IB の認定を目指す学校は、候補校申請書 (AFC: Application for Candidacy) 申請時に作成するアクションプラン（後述）に沿って、認定に向けたプロセスが進んでいくこととなりますが、そのプロセスの中で徐々に改善していく姿勢が求められます。IBO も、各学校の事情を尊重した上で、協力して認定を目指す支援体制を整備しています。

候補校になると、IBO のコンサルタントが担当として就きます。各候補校は、コンサルタントからの助言を受けながら、PYP 校として試行し、アクションプランを組み立て、IB の要件に沿った実施を行うことで、認定を受けられる仕組みになっています。アクション

プランの作成に際しては、学校内の関係者の調整が不可欠となりますので事前に PYP コーディネーターを中心とした IB 認定に向けたチームを形成していくことが重要です (PYP コーディネーターの役割は第 3 章を参照)。また、各候補校は、しっかりとした教育理念を持って IB 教育に携わっていくという認識を学内で共有することが必要となります。

なお、IBO は、関係文書の一部を日本語に翻訳し、「[Resources for Schools in Japan](#)」としてウェブ上で公表しています。学校の管理者や教員の皆さまは是非ご覧ください。

## 1-2. スクールインフォメーションフォームの提出

スクールインフォメーションフォームの提出は IB 認定に向けた関心校としての最初のステップです。IBO のウェブページ、「[Become an IB World School](#)」にアクセスすると詳細が出てきます。入力する内容は、学校名や校長名、住所などの基本的な情報で、オンラインで提出します。提出は無料です。登録が完了すると、IBO から学校へ文書が送付されません。

## 1-3. 候補校申請書の提出

学校は、IBO に候補校申請に必要な書類を提出し、受理されると候補校となります。候補校申請を行う前に学校の管理者 (IB 導入の責任者で、多くの場合は校長または教頭) は、PYP のワークショップ (Head of school) を受講する必要があります。候補校申請書類を提出する際には申請費がかかります。

## 1-4. 候補校申請に関わる添付資料について

### ①アクションプラン

アクションプランは認定に向けたプロセスの基準となる資料です。「プログラムの基準と実践要綱 (Programme Standards and Practices)」に基づいて、現在の取り組みや今後の見通しなどを記載します。候補校申請書の提出時点で、全ての項目に対応している必要はなく、これから検討・準備するという項目があっても構いません。まずは、しっかりと学校の現状に合わせて、アクションプランを作成して提出することが大事であり、提出後、コンサルタントとのやり取りを通して改善を図っていきます。

### ②学校の法的位置づけを説明する書類

公立校であれば、都道府県や市町村の学校設置条例、国立大学附属学校であれば、国立大学法人法 (法人化される前に設立された場合) または大学の設立に関する官報 (国立大学法人化された後に設立された場合)、私立校であれば、設置認可書類、登記簿等の翻訳を外部に委託し、翻訳証明書を付して提出します (認定プロセスにおいて、外部の正式翻訳を必要とするものは、この文書だけです)。

### ③管理団体からの財政援助を証明する旨の書類

法人の理事長名等での英文レターを提出します。参考までに記載例を掲載します。

To the International Baccalaureate Organization,  
(理事会、都道府県名、大学名等) is committed to financially support the  
implementation of International Baccalaureate Primary Years Program at Monka  
School. September 20th, 2016.

(理事長名、都道府県知事名、学長名等)  
(役職名)  
(組織名、都道府県名等)

### ④組織図

学校の組織図の英語版を作成して提出します。組織図には、PYP コーディネーターの位置付けを示す必要があります。その他に管理職を中心とした Pedagogical Leadership Team (PLT) や実践カリキュラムを構成する教員チームの Curriculum Leader Teacher (CLT) を示す場合もあります。

#### 1-5. 候補校申請書の検討

学校が提出した候補校申請書は、IBO が内容を確認し問題がなければ、候補校として通知されます。なお、候補校認定後、学校には My IB、IBO の Information System のログインに必要なパスワードなどが与えられることにより、以後これらのページに自由にアクセスできるようになります。

#### 1-6. 候補校期間 (PYP の試行実践) 開始・コンサルタントの決定

PYP 候補校は、PYP の実践を IB の理念に沿って行います。候補校になると、IBO から 1 名のコンサルタントが紹介されます。コンサルタントは、学校が認定に向けてどのように準備し、どのように PYP を実践していけばよいかについて、助言・指導・伴走支援を行う役割を担います。

#### 1-7. 候補校期間中の実践

PYP の場合は、コンサルタントに相談をしながら、候補校期間中も認定校と同じように実践を行うことができます。探究学習を各校で考えて実践を行うため、準備をいつまでに行い PYP 候補校としてどの程度の実践をしていくか、校内で検討していく必要があります。もちろん候補校期間開始の時点で全ての実践ができている必要はありません。コンサルタントに相談しながら、どの時期にどのような実践をしていくのか、アクションプランに記載し、その実践を振り返り、改良しながら可能な限り IB の要件に沿った実践ができるよう目指します。

コンサルタントとのやりとりは、原則、PYP コーディネーターがメールまたはオンライン会議システムを用いて行います。コンサルタントの支援時間は、年間 20 時間程度と定められていますが、コーディネーターは、どのような支援を受ける必要があるのか、コンサルタントと丁寧に協議し、進めていくことが重要になります。

#### 1-8. コンサルテーション訪問

候補校期間中に、コンサルタントは、学校を訪問し、直接的な評価を行うとともに、フィードバックを行う必要があります。これをコンサルテーション・ビジット（コンサルテーション訪問）と言います。この訪問に決められた時期はありません。実際に、コンサルタントと相談をして実施日を決めることとなります。訪問は、原則 2 日間です。コーディネーターはもちろんですが、管理職、全ての教科の教員、児童、保護者が面談可能な日を候補に挙げるのが望ましいです。

訪問のための費用は、学校の負担となります。コンサルタントと協議を進めて支払い方法等を決定していきます。コンサルタント訪問の結果は、コンサルテーションレポートとして学校に通知されます。コンサルテーションレポートは、項目ごとに 3 段階（良い、普通、もう少し等のイメージ）の評価が付されます。

これらの評価を基に、残りの候補校期間のアクションプランを組んで、コンサルタントからの支援を引き続き受けます。

#### 1-9. 認定申請書の提出

前述のコンサルタント訪問を経て、何度かやり取りを行った後、コンサルテーションレポートの各項目がおおよそ「良い」評価になったところで、コンサルタントから学校に、認定校申請書の提出の許可通知が送られます。通知を受けて 1 ヶ月以内に、学校は認定校申請書を IBO に提出します。認定校申請は指定された様式の「Application for authorization」と各種添付資料で構成されます。内容は主に候補校申請時の資料を更新したものとなります。また、PYP の認定校申請では候補校期間に行っている PYP の実践の証拠（単元計画等）の提出を求められます。

#### 1-10. 認定校申請書の検討

学校が提出した認定校申請書は、IBO の担当者が内容を確認します。提出から 42 日以内に IBO から IB 認定校および候補校専用のオンラインプラットフォームである MY School（申請書類の提出・IBO からの指摘事項の受領・学校と IBO のやり取りを行う公式オンラインシステムで、認定プロセス全体を通じて使用）にフィードバックがあります。

IBO からのフィードバックに基づき、必要な課題の解消が求められ、場合によっては課題を解消したことを示す資料の再提出を求められる場合があります。そして、おおよそ書類検討による問題点が解決した後、確認訪問の日程調整が行われます。

## 1-11. 確認訪問

訪問日程調整後、確認訪問団（通常2名）が学校を2日間訪問し、認定校となるための準備が整っているのか最終的な確認を行います。確認訪問団の訪問の際の費用は学校の負担となります。

なお、2日間の訪問では、施設確認、所属の教育委員会などの管理団体や教職員（校長、PYP コーディネーター、各教員、図書館司書など）、そして数名の児童と保護者との面談が日程に組み込まれます。

## 1-12. 認定

確認訪問団の訪問後、レポートが My School に届きます。必要に応じて資料の再提出を求められる場合があります。特に問題がない場合は、認定の同意書が My School に届きます。この通知をもって、学校は IB 認定校となります。

## 1-13. 認定後の定期評価訪問

IB 認定校となった後も、学校は定期的に IBO の確認を受けます。5年に1度実施される評価訪問がそれに当たります。学校側は評価訪問に係る費用を負担する必要があります。

## 1-14. 認定までの学校の宣伝

本章では認定までのプロセスを説明しました。学校は認定までの過程で関心校→候補校→認定校と進んでいきますが、昨今、「IB 校を目指す」という文言を学校のホームページやパンフレットで掲載し、児童募集を行うケースが散見されており、IBO が事態を懸念しています。当然ながら、目指すことは認定を保証するものではなく、事態に遅延や決定的な変更が出た場合、不利益を被るのは児童、保護者、そして学校です。そのことを念頭に、宣伝については慎重になるべきだと考えられます。IBO ではスクールインフォメーションフォームを提出済みで IB プログラムの提供を検討している学校は、現在の学校関係者および関係当局に計画を通知することができます。ただし、学校関係者以外の方が目にする可能性のある公開ウェブサイト、広告、または学校資料では、IB または IB プログラムについて一切言及してはなりません。IBO は候補校について以下の宣伝用の定型文を作成しています。英語原文は、[「Required text for candidate schools to use in marketing materials」](#)をご覧ください。

#### 候補校用 宣伝用の定型文

「学校名」は、国際バカロレア（IB）「プログラム名」の候補校（※）です。本校は、IB ワールドスクール（IB 認定校）としての認定に向けた申請段階にあります。IB ワールドスクールは、「質の高い、チャレンジに満ちた国際教育に信念をもって取り組む」という理念を共有する学校です。「学校名」も、このような教育に取り組むことが、児童にとって大切であると信じています。

（※）IB の「初等教育プログラム」（PYP）、「中等教育プログラム」（MYP）、「ディプロマ・プログラム」（DP）および「IB キャリア関連プログラム」（CP）の4つのプログラムを実施することができるのは、国際バカロレア機構に認定された学校のみです。候補校であることは、IB ワールドスクールとして認定されることを保証するものではありません。国際バカロレア機構および IB のプログラムの詳細については、ウェブサイト（<http://www.ibo.org>）をご覧ください。

## 第2章 費用

本章では費用に係る情報を整理します。各プログラムの運用等に係る費用については、「[Fees and services](#)」より、最新の資料を確認してください。

PYP 校として必要な費用項目例

項目
候補校申請費用
候補校会費
認定校会費
評価訪問費用
ワークショップ費用

### 2-1. 予算措置

IB 校としての予算措置は必要不可欠です。次のことを考慮しながら、予算の準備を行う必要があります。

- 年会費の支払いは、日本の会計年度と一致しないため考慮が必要な場合がある。
- 認定に向けては、校長、PYP コーディネーターおよび PYP に関わる全教員がカテゴリー 1 のワークショップを完了している必要がある。※非常勤教員も計画的に受講させることが必要である。
- 認定の際、将来的にどの程度予算措置がされているかについて確認される場合がある。

### 2-2. 支払い方法

IB への支払いは銀行振込です。振込手数料は学校負担となります。また、請求は原則、SGD でされるため、予算は多めに準備しておくことをお勧めします（為替レート等による変動あり）。

ワークショップに関する費用は、クレジットカードでの支払いがお勧めです。受講者が支払いを行うのではなく、学校が行う場合には、学校（もしくは、校長）名義のクレジットカードを持っておくことで、支払い手数料等を節約することができます。

## 第3章 コーディネーターおよび教員の育成

### 3-1. PYP コーディネーターについて

コーディネーターは、IBの導入を図る際に必要な役職であり、認定校になった後もIBの運営について最も重要な役割を果たします。コーディネーターはIBに係る全ての関係者（IBO、学校管理者、教員、児童、保護者など）との間の連絡調整を担うこととなります。IBOとのやり取りは全て英語で行われます。IBの教育理念について精通しているだけでなく、認定に向けたプロセス、カリキュラムの作成・評価等について十分に理解し、リーダーシップを発揮する必要があります。

コーディネーターは、常勤教諭が務めるのが前提ですが、これは、他教員に対して指導的な立場に立つため、現場を熟知している教員が責任を担うのが望ましいとの理由からです。なお、コーディネーターになるためには、IBOが実施するコーディネーター対象のワークショップを、確認訪問時までには受講する必要があります。

また、コーディネーターは前述の通り、IBOとの連絡調整はもちろん、校内の組織運営においても中心的立場になるため、持ち時数も考慮する必要があります。学校の規模や方針によりますが、IB導入当初は、コーディネーターがクラスの担任も担当する場合があります。この際気を付けなければならないことはIBOが定めている職責を実際に果たせるような人員配置を確実に行うことです。コーディネーター業務は片手間で行えるようなものではなく、高度な専門性が求められます。その点も含め、上述の通り持ち時数等も考慮する必要があることを管理職は理解しなければなりません。コーディネーターの業務実施に際する環境整備は努力義務ではなくプログラムの実施要件であることに注意することが必要です。

### 3-2. 教員の育成について

IB教員は、Teacher（教える者）というよりFacilitator（促す者）と表現されます。単に教壇から知識を伝達するのではなく、児童間の議論を促し、アイデアを引き出すことが求められるからです。IB教員として認定されるためには、IBOが主催するワークショップに参加することが必要です。原則3日間のワークショップ（対面、ヴァーチャル、オンラインワークショップがある）に参加すれば、IB教員として現場に立つことが可能ですが、教員は、科目ガイドが改訂されるタイミングで、その都度ワークショップに参加する必要があります。

また、プログラムを運営、実施していくために、コーディネーターを中心に管理職を含めて委員会を立ち上げる必要があります。これは前述したようにPLTやCLTという名称で組織図に掲載することからも、校内の教員全員がプログラムに関わるように組織し、研修を行い、会議を密にするような体制づくりが必要となります。

### 3-3. 教員の確保について

IB 教員の養成のための動きも出てきています。現在、国内において IB の教員養成に取り組んでいる大学は次の通りです。

- 岡山理科大学 IB 教員養成プログラム
- 関西学院大学 国際バカロレア (IB) 教員養成プログラム
- 国際基督教大学 IB 教員養成プログラム
- 聖隷クリストファー大学 国際バカロレア教員養成プログラム
- 玉川大学 IB (国際バカロレア) 研究コース
- 筑波大学 教育学学位プログラム国際教育サブプログラム
- 東京学芸大学 国際バカロレア教員養成特別プログラム
- 都留文科大学 教養学部国際教育学科

文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムでは、こうした大学・大学院を含む大学関係者を対象に情報交換会を開催するなど、好事例が国内に広がっていくよう協力しています。

その上で、我が国の教員免許を持つ教員が IB を教える場合、上記のワークショップや IB 教員養成大学で資格を取得する方法があります。一方で、外国人など我が国の教員免許を持たない人材を IB 教員として雇用し、学習指導要領に位置付けられた教科・科目を担当させる場合は、我が国の教員免許が必要です。IB 科目を学校設定教科として実施する際も、その内容に最も近い科目の教員免許が求められます。

その際、是非活用いただきたいのが「特別免許状」制度です。社会人など優れた知識・経験を持つ人材を対象に、都道府県教育委員会が授与することとなっています。授与に係る審査基準は、都道府県教育委員会ごとに定められていますが、文部科学省で指針を策定しています。実際に、札幌市教育委員会ではこの特別免許状制度を活用して外国人の方を登用しています。特別免許状の活用についての詳細は、文部科学省あるいは各都道府県教育委員会の担当部署までお問合せください。特別免許状制度の詳細については、文部科学省ホームページを参照ください。

### 3-4. 研修について

ワークショップとは、IB における教員研修のことです。全てのセッションに参加すると、該当する研修参加認定証が授与されます。通常、1つのワークショップ (対面、ヴァーチャル) は3日間にわたり実施されます。オンラインのワークショップは2~4週間程度となります。研修のレベル (参加者による IB の理解度) によってカテゴリー1~3があります。

<ワークショップの種類 (参加必須のもの)>

#### ①学校の管理者等を対象にしたワークショップ

- アドミニストレーターワークショップ⇒人事や予算など、学校経営を担う者を対象として、IB の理念や学校内の協働方法などについて学びます。
- コーディネーションワークショップ⇒IB に関する全ての調整実務を担当するコーディネーターの育成を行います。

## ②教職員を対象にしたワークショップ

- 教科別ワークショップ⇒PYP に関するワークショップ（カテゴリー 1）を修了すれば、IB 教員の資格を得られます。なお、科目内容が改訂されるごとに受講する必要があります。参加費に関しては、「[Find workshop](#)」から御確認ください。PYP の場合、最低限参加しなければならないワークショップは以下のとおりです。

ワークショップの種類

ワークショップの種類	対象者	必要となる時期
Head of school	校長・副校長・教頭などの学校管理者	候補校申請まで
Leading the learning	コーディネーターとなる者	確認訪問まで
Building your IB Programme: Primary Years	PYP に関わる全教員がワークショップを受講する。※非常勤教員も含む	確認訪問まで

なお、ワークショップは参加者の経験度に応じて3つの区分に分かれます。（交通費・宿泊費・ワークショップ参加費用が必要となります）

カテゴリー 1	申請を決めた学校向けに、専門的能力や支援を提供するもの。原則として、このワークショップを受講すれば、IB の教育者としての資格が付与される。
カテゴリー 2	経験のある IB 教育者向けに、プログラムの実施に焦点を当てたフォーラムを提供するもの。
カテゴリー 3	経験のある IB 教育者向けに、専門的な能力を構成・強化するためのフォーラムを提供するもの。また、候補校申請までにアドミニストレーター対象のワークショップを受講しなくてはならない。

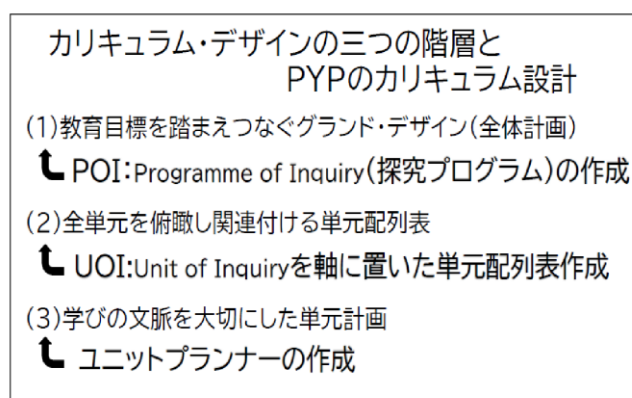
## 第4章 カリキュラム編成

### 4-1. カリキュラム編成例1

#### 4-1-1. 学習指導要領との整合性を図る PYP の探究プログラムの作成

PYP では、6つの教科の枠を超えたテーマに基づいた探究ユニットを軸に、一年間のカリキュラムを構成する必要がありますが、カリキュラム・デザインの視点から考えると、多くの学校で行われているカリキュラム編成と大きく異なることはありません。

カリキュラム・デザインの3つの階層と PYP のカリキュラム設計



上記に示す通り、カリキュラム・デザインの3つの階層があります。学校の教育理念や目標を踏まえて、学年間の縦のつながりを確認できるようにするために作成する全体計画は、探究プログラムである Programme of Inquiry (POI) です。学年ごとの年間の各教科の学習を、教科横断の視点に立ってつながりを考えながら作成する単元配列表は、Unit of Inquiry (UOI) です。それらを軸に置いた各教科の単元計画は、ユニットプランナーの作成に、それぞれ置き換えると考えられるからです。

1年をスタートする段階で、PYP の探究プログラムである POI を完成させる必要があります。各学校の全体計画でもありますので、教育目標や目指す子供の姿など踏まえて計画を立てていきます。POI では、6つの教科の枠をこえたテーマのもとに、各学年の探究ユニットを設計していきます。その際に、各学年のユニットを縦で見て、テーマへの理解が次第に深まるように設計されているか、ユニットの内容の重なりがないかなどを確認していきます。また、各ユニットは、それぞれの学年の学習内容を踏まえて設計していくこととなります。

例えば、How the world works (世界はどのような仕組みになっているのか) の探究では、1年生は、生活科のアサガオの栽培をメインピックとして、「観察」を探究するユニット、2年生では、生活科の夏野菜の栽培をメインピックとして、「生物の知恵」を探究するユニット、3年生は、理科の身近なエネルギー (風、ゴム、磁石) の学習をメインピックとして、「エネルギーの活用」を探究するユニット、そして、4年生では理科の月や星の学習をメインピックとして、「宇宙の仕組みと活用」を探究するユニットを設定

していきます。IB から示されている各テーマの説明に示される探究領域に沿って、1つのテーマをいろいろな角度から探究することによって、教科の枠をこえたテーマの概念的理解が深まるようになっていくことが大切です。

POI には、セントラルアイデアおよび探究の流れ、また、それぞれのユニットで発達を目指す ATL や学習者像等を書き込みます。全体を通して、Approaches to Learning (ATL) や学習者像がバランスよく、漏れなく組み込まれているかを確認することも大切です。POI は、年度の終わりに教員全員で振り返り、改訂していきます。良かった点と改善すべき点を話し合い、協働で作成していきます。そして、次の年度のグランド・デザインである POI を準備していきます。

教科の枠をこえた探究プログラム (POI) ～PYP 校のグランド・デザイン～



2024 Shizuoka Salesio Kinder and Primary POI



P1	<p>Central Idea</p> <p>The school is full of excitement and wonders!</p>	<p>Observation lets people notice the state and change of nature.</p>	<p>Expression expands by acquiring various skills.</p>	<p>People's choices affect the lives of other creatures.</p>	<p>People change their behavior depending on time and place.</p>	<p>Growth is affected by time, place, and people.</p>
	<p>セントラルアイデア</p> <p>学校はどきどきワクワクでいっぱい!</p>	<p>観察は、自然の様子や変化に気付かせてくれる。</p>	<p>技を習得することで表現の可能性を広げることができる。</p>	<p>人の選択は、他の生き物の生活に影響する。</p>	<p>人は、時間や場所に合わせて行動の仕方を変える。</p>	<p>成長は時・場所・人に影響される。</p>
	<p>LOI</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特徴 学校はどこなところか</li> <li>機能 学校にいる人の役割</li> <li>関連 学校にいる人と自分の関わり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>機能 観察のしかた</li> <li>視点 観察の視点</li> <li>変化 観察を通してわかる成長と変化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特徴 「わざ」とは何か</li> <li>機能 「わざ」の機能の確かめ</li> <li>視点 「わざ」の選択と表現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特徴 海の生き物の生息地</li> <li>視点 虫と外来生物</li> <li>関連 自分の行動とのつながり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特徴 遊びの種類</li> <li>機能 季節のかかわり</li> <li>関連 場所や時代とのかかわり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>変化 何ができるようになったのか</li> <li>視点 2年生の目標</li> <li>関連 他の人のためにできること</li> </ul>
	<p>探究領域</p> <p>経済活動と人間及び環境への影響</p>	<p>自然界とその法則</p>	<p>限られた資源を他の人々や生物と共有するにあたっての権利と責任</p>	<p>アイデア、感情、自然、文化、信念、価値観の発見と表現</p>	<p>地域社会とグローバルの観点から見た個人と文明の間の関係及びそれらの相互のつながり</p>	<p>自己の本質</p>
P2	<p>Central Idea</p> <p>Society is driven by various kinds of work.</p>	<p>Plants have an important life and use wisdom to sustain life.</p>	<p>Conflict between humans and animals is caused by wants and needs.</p>	<p>People find joy in using their power for others.</p>	<p>The state of culture is influenced by changes in people's lifestyles and ways of thinking.</p>	<p>Identity is formed through interactions with others.</p>
	<p>セントラルアイデア</p> <p>社会は様々な仕事によって動いている。</p>	<p>植物には大切な命があり、命をつなぐために知恵を使っている。</p>	<p>人と生きものの関係は、欲求と必要性のバランスに左右される。</p>	<p>見方を変えれば世界が変わる</p>	<p>文化は人の生活や考え方に影響され「き」は確立される。</p>	<p>他者とのかかわりの中で「自分らしき」は確立される。</p>
	<p>LOI</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特徴 私たちの身の回りにはどんな仕事があるのか</li> <li>関連 私たちの生活と仕事との関係</li> <li>機能 社会における私の仕事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>機能 植物のからだのつくり</li> <li>変化 植物の変化</li> <li>原因 植物が仲間を増やすための知恵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特徴 絶滅危惧種とは何か</li> <li>原因 なぜ絶滅危惧種なのか</li> <li>責任 環境を使う権利と責任</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ものの見方</li> <li>見方を使って考える良さ</li> <li>見方・考え方を働かせるということ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>私たちの文化の再発見</li> <li>行事の発展と移り変わり</li> <li>私たちの暮らしと文化のつながり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>私たちの成長を支えてくれた人</li> <li>関わりによって変化・成長したこと</li> <li>自分の良さと他者と関わる責任</li> </ul>

一条校において PYP を実践する上で、特に重要だと考えられるのが、UOI を中心に置いた単元配列表の作成です。これは、POI に組み込む形で作成してもよいと思います。多くの学校では、教科横断の視点に立って、生活科、総合的な学習の時間を中心に置いて単元配列表を作成していると思います。同じように、単元配列表の中心に6つの探究ユニットを据え、各教科をその上下に配置します。ユニットの学習内容に対し、どの教科のどの学習内容や要素が関わるかをマッピングする形で、一年間の学習内容を俯瞰的に捉えられるように作成します。そうすることにより、学習指導要領に示された学習内容を確認するだけでなく、どのように意味や価値をもって学習することができるかを考えることにつながります。それとともに、教科間の学びのつながりを把握することもできます。

また、関連して、一条校として学習評価をするための評価規準の作成にもつながります。それぞれの教科の学習の内容と目標を確認し、それを探究の中で生かすことによって、評価計画もより明確に立てることができます。

探究と教科をつなぐ単元配列表 ～教科の学びを探究で生かす計画の作成～

Grade 3 単元配列表 2024

教科等	4月	5月	6月	7月	8月			
算数(学図)	かけ算(7)	時ごくど時間(6)	わり算(10)	倍の計算(1)	たし算とひき算(13+1)	表とグラフ(7)	長さ(7)	算数を使って(1)
理科(大日本)	しぜんのかんさつ(4)	植物の育ち方①たねまき(6)	こん虫の育ち方(10)	植物の育ち方②葉がふえたころ(1)	ゴムと風の力のはたらき(7)	音のふしぎ(7)	植物の育ち方③花(1)	
社会科(文教)	わたしたちの住んでいるところ わたしたちの住んでいる市のようす(17)		安全な暮らしを守る 安全な暮らしを守る人々の仕事(16)					
生活科(教出)								
国語(光村)	よく聞いてじこしょうがい(1)	春風をたどって(8)	もっと知りたい、友達のこと(6)	ありの行列(7)	まいごのかぎ(7)	仕事のかふう、みつけたよ(10)		
	どきん(1)	国語辞典(2)	わたしの町のよいところ(10)		気持ちをこめて「来てください」(4)	こそあど言葉を使いこなそう(2)	本は友達(5)	
	わたしのさいごの一日(1)	春のくらし(2)			引用するとき(2)	俳句を楽しもう(1)	夏のくらし(2)	
	図書館たんでいだん(1)	漢字の広場	漢字の音と訓(2)	漢字の広場②(2)	漢字の広場③(2)			
UOI	How we organize ourselves 人間がつくったシステムとコミュニティの間の相互のつながり  人の暮らしやすさは社会のシステムとその働きによって成り立つ			How the world works 科学原理の理解を人間がどのように利用しているか  人は科学的な知識と理解を発明や創造に応用する。				
音楽(教育芸術社)	音楽で心をつなげよう 春の小川	音楽で心をつなげよう 茶つみ	リコーダーの響きに親しもう	拍に乗ってリズムを感じ取ろう ゆかいな木琴				
体育	・多様な動きをつくる運動(固定器具を用いた運動) ・鉄棒運動(さかあがり、回転系の技) ・走の運動(かけっこ、カーブ走、リレー)			・マット運動(支持のある前転、後転、壁倒立) ・鉄棒運動(回転系の技) ・走・跳の運動(はばとび) ・ボール運動(ベースボール型ゲーム) ・保健(けんこうな生活) ※水泳				
図工	絵 僕・私の好きなもの「オリジナルポロシャツ」 ・スケッチペン ・はさみ ・絵の具	スケッチ「手」「昆虫」よく見て丁寧に描こう ・スケッチペン ・絵の具	想画「昆虫デザイン」 ・スケッチペン ・絵の具	工作 わくわくカッターナイフ ・カッターナイフ	工作 ○○で動く車をつくろう ・はさみ ・のり(ポンド)			
宗教	・かみさまってどんなかた ・かみさまがおつくりになったもの ・いのりをおぼえよう	・かみさまはひとりひとりをあいされた ・めぐみをとりについでくださるマリアさま	・かみさまのあい ・じぶんのまわりのひとをあいそう	・わたしたちはみなきょうだい ・たがいにたいせつにしあう				
行事		聖母祭		サレジオ祭	桃沢宿泊学習			

実際に探究の詳細を決めていくのが、探究ユニットの計画であるユニットプランナーの作成になります。各教科の単元計画、単元指導案と同じ意味合いのものになります。ユニットプランナーの最初のセクションは、ユニットの概要を示したものです。最初のページには、教科の枠をこえたテーマ、セントラルアイデア、探究の流れ、特定概念と付加概念、ATL、学習者像について、詳しく書き込んでいきます。

2 ページ目には、総括的評価課題と評価表、児童の知ることと、できるようになることをそれぞれ記載していきます。3 ページ目には、各教科のユニットにおける役割や、ユニットに関わる学習内容を記載していきます。単元配列表と照らし合わせながら、それぞれの教科の単元について、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう主体的な態度について確認し、特にユニットにおいて重要となる部分にはハイライトを入れていきます。そうすることで、各教科、教科間、教科をこえたつながりを確認でき、さらに各教科における学習評価も併せて計画することができます。次のセクションでは、実際の計画に関わる部分を記載していきます。既有知識の確認、形成評価、探究を駆動する発問や機会、エージェンシー（児童が自ら学びを選択し、意思決定し、責任をもって行動する力）の発達などについて記載することになります。ここまで決定してから、最後に学習活動について考えていきます。

## 教科をこえた学びを実現する UOI ～概念的理解を導くユニットプランナーの作成～

- - REFLECTING & PLANNING - -												
Unit Focus (ユニットフォーカス) - Overview -												
<p><b>Transdisciplinary Theme (教科の枠をこえたテーマ):</b> What element(s) of the theme descriptor will be addressed?</p> <p>Sharing the planet この地球を共有すること</p> <p>An inquiry into rights and responsibilities in the struggle to share finite resources with other people and with other living things; communities and the relationships within and between them; access to equal opportunities; peace and conflict resolution.</p> <p>限られた資源を他の人々そして他の生物とどのように分け合うかという点に取り組みうるでの、権利と責任について、コミュニティとは何か、そしてコミュニティ内およびコミュニティ間の関係性、機会均等の実現について、平和そして紛争解決についての探究。</p>	<p><b>Central Idea (セントラルアイデア):</b></p> <p>Responsible action creates a sustainable world. 責任ある行動が持続可能な世の中をつくる</p> <p>概念的理解 私たちは、ゴミを出さずに生活することはできない。しかし、なるべくゴミを出さないように意識して生活することが大切である。そのためには、企業、行政、消費者の三者が協力して、ゴミを減らすだけでなく、ゴミにならぬものを減らす取り組み(Reduce, Refuse, Reuse)を進めていく必要があり、未来の社会の創り手である私たち一人ひとりの責任である。そうすることで、未来の環境を守る循環型社会の形成につながる。</p>	<p><b>Lines of Inquiry (探究の流れ):</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Definition of "Gomi" (garbage, trash, rubbish, litter, debris, etc.) ゴミとは何か</li> <li>Local and Global Environment and "Gomi" Issues 地域及び地球環境とゴミ問題</li> <li>What we can do for society to achieve a sustainable world 持続可能な世界を目指すための社会のためにできること</li> </ul>										
Transdisciplinary Elements (学際的要素)												
<p><b>Key Concepts (重要概念):</b> 2-3</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Causation 原因・仕組</li> <li>Perspective 視点・視野</li> <li>Responsibility 主体・責任</li> </ol>	<p><b>Related Concepts (関連概念):</b> From 2-3 subject areas (教科エリアとの関連)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Resources 素材</li> <li>Recycling リサイクル</li> <li>Sustainability 持続可能性</li> </ul>	<p><b>Approaches to Learning (学習の方法):</b> What skills are the students practicing to develop? What connections can be made between the ATL and Learner Profile? 生徒はどのようなスキルを身に付けるために練習していますか？ ATLと学習者プロフィールの間にはどのような接続を確立できますか？</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>Main</th> <th>Sub</th> <th>Students become to be able to</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Thinking</td> <td>Critical-thinking skills - Analyzing and evaluating issues and ideas - Propose and evaluate a variety of solutions.  批判的思考スキル(問題点や考えを分析し、評価する) - さまざまな解決策を提案し、評価する。</td> <td>Think about ways to protect the global environment as a person living on the earth and clarify the claim.  身の周りのゴミ問題から、地球に住むひとりとして地球環境を守るための方法を考え、主張を明確化する。</td> </tr> <tr> <td>Communication</td> <td>Literacy skills - Reading, <u>gathering</u> and using language to gather and communicate information - Organize information logically.  リテラシー - 書く・情報を論理的に整理する</td> <td>Know the garbage problem, gather information to solve it, analyze it, think logically and organize it.  ゴミ問題を知り、解決するための情報を集め、分析し、論理的に考え整理する。</td> </tr> </tbody> </table>		Main	Sub	Students become to be able to	Thinking	Critical-thinking skills - Analyzing and evaluating issues and ideas - Propose and evaluate a variety of solutions.  批判的思考スキル(問題点や考えを分析し、評価する) - さまざまな解決策を提案し、評価する。	Think about ways to protect the global environment as a person living on the earth and clarify the claim.  身の周りのゴミ問題から、地球に住むひとりとして地球環境を守るための方法を考え、主張を明確化する。	Communication	Literacy skills - Reading, <u>gathering</u> and using language to gather and communicate information - Organize information logically.  リテラシー - 書く・情報を論理的に整理する	Know the garbage problem, gather information to solve it, analyze it, think logically and organize it.  ゴミ問題を知り、解決するための情報を集め、分析し、論理的に考え整理する。
Main	Sub	Students become to be able to										
Thinking	Critical-thinking skills - Analyzing and evaluating issues and ideas - Propose and evaluate a variety of solutions.  批判的思考スキル(問題点や考えを分析し、評価する) - さまざまな解決策を提案し、評価する。	Think about ways to protect the global environment as a person living on the earth and clarify the claim.  身の周りのゴミ問題から、地球に住むひとりとして地球環境を守るための方法を考え、主張を明確化する。										
Communication	Literacy skills - Reading, <u>gathering</u> and using language to gather and communicate information - Organize information logically.  リテラシー - 書く・情報を論理的に整理する	Know the garbage problem, gather information to solve it, analyze it, think logically and organize it.  ゴミ問題を知り、解決するための情報を集め、分析し、論理的に考え整理する。										
<p><b>Learner Profile Attributes (学習者像):</b> How does the learning support the development of the Learner Profile? 学習は、学習者像の発達をどのようにサポートしますか？</p> <p>Reflective 振り返りができる人 People who look back and develop ways of living for a sustainable world while understanding the good and bad things they do with garbage so that they can learn and grow as members of the world. 自分たちが世界の良しとして学び、成長していくために、ゴミに対して行っている良いこと悪いことを理解しながら持続可能な世の中のための生活を振り返り、発展させる人。</p> <p>Caring 思いやりのある人 A person who respects others, helps others, and works to improve the lives of others and the world around us. 他者を尊重し、人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動する人。</p>												

PYP では逆向き設計でゴールから全体を考えていくため、学習活動は最後に決めることになります。セントラルアイデアに示されるゴールに向かうために、どのような学習内容、学習体験が必要であるかを考え、探究サイクルに沿って決めていきます。

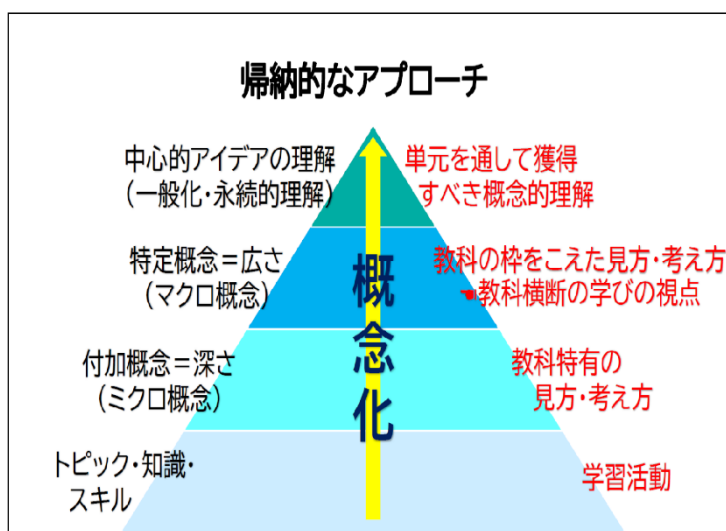
ここまですべてがスタート前に作成します。ただし、プランナーはあくまでも計画でしかありません。探究を進めていく過程で、内容や順序の変更が生じることもあります。そのために、毎週、担任とコーディネーターがミーティングを行い、子供たちにとってより良い探究となるよう修正をしていきます。最終的には、探究ユニットに関わった教員で

振り返り、全体の反省を最後のセクションに記入し、次年度の POI を作成する際に活かしていきます。

#### 4-1-2. 探究ユニットの設計と実践

PYP の探究は、概念型カリキュラムです。ゴールである中心的アイデア（セントラルアイデア）の理解に向けて、トピックとなる学習内容を、特定概念、付加概念といった概念レンズを通して、客観的・批判的に見ることで、概念的理解へとつなげていく、帰納的な学び方になります。これは、学習指導要領に示される学び方と重なるものです。学習指導要領では、それぞれの教科において、学習活動を、教科の見方・考え方を働かせて、概念として理解することが求められています。さらに、教科横断の視点をもって、カリキュラムをデザインすることも求められていますので、教科の枠をこえた見方・考え方、すなわち、どの教科でも働かせることができる見方・考え方として、PYP の特定概念は機能すると考えられます。つまり、PYP の学習方法は、学習指導要領で求められる学習と指導を実現できる有効な学び方であると言えます。

PYP の単元および授業設計における考え方



PYP 探究ユニットの実践例（低学年）

対象学年	第1学年
教科の枠を超えたテーマ	How the world works 世界はどのような仕組みになっているのか
セントラルアイデア	観察は自然の様子や変化に気づかせてくれる
探究の流れと特定概念	1 機能 観察の仕方 2 視点 観察の視点 3 変化 観察を通してわかる成長と変化

ATL スキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リサーチスキル：観察したことを、絵、メモ、図、数量、文章、画像とその注釈を使って記録する。</li> <li>・コミュニケーションスキル：観察して分かったことを友だちや家族に伝える。</li> </ul>
学習者像	知識のある人

1年生の生活科では、アサガオの栽培活動が多く为学校で行われていると思います。5月から6月にアサガオの種を渡し、鉢に土を入れ、植え方を説明し、水やりを忘れずにするように子供たちに伝えます。子供たちはアサガオの芽が出るのを楽しみにしながら水やりを続けます。

しかし、子供たちは本当にアサガオを育てることに価値や意味を感じているのでしょうか。なぜなら、これらは全て「与えられた学び」であるからです。その証拠に、私の経験では、水やりを忘れてたり、やらなかったりする児童が少しずつ増えていきました。

学びにおいて大切なことは、子供たち自身が学びに対して責任を持ち、意味や価値を感じながら学ぶことです。そこで、アサガオの栽培をトピックに、「観察の価値」を確かめるといふ子供たち自身が解決すべき問題として取り組めるように、生活科単元を軸においた探究のユニットとして計画しました。

#### 生活科単元を軸においた探究のユニット例

生活科単元	PYP探究
アサガオを育てよう たねをえらぼう	これはなんだろう？→なぜ種だと言える？ →よく見てみよう→本当にアサガオのタネなのかなあ？ →育てて確かめないといけない（解決すべき問題）
たねをまこう 鉢に土を入れて種を植えよう。	どうやって植える準備をするのだろう？ 育てるには何が必要なのだろう？ どうやって育てるのだろう？→育て方を調べなければ！
めがでたよ 観察して記録をしよう。	アサガオの芽と似ている！でもまだ分からない。 変化の様子を追っていけば分かるかもしれない。 →記録（観察のカード）をする必要がある
せわをしよう 世話の仕方を考えて、毎日世話をしよう。	葉の様子が似ている。つるが伸びてきている。 →だんだんアサガオの特徴と似てきているけど、まだ分からない。→花が咲けばわかる！（観察する意味・価値） ・アサガオだとしたら・・・ 支柱を立てる必要があるらしい。 肥料をまたあげる必要があるらしい。 →アサガオだと仮定して、調べた方法で育ててみよう。

#### <導入 (Tuning in) >

PYPの探究ユニット導入にあたり、生活科の単元学習からアプローチを大きく変更しました。生活科の評価規準では、例えばアサガオの栽培を通して、以下のような知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度を育成すると示されています。



国語の教材にも観察を扱ったものがあるため、それを活用し、観察の視点や方法を学ぶと、子供たちは、日々変化していくアサガオの様子を定期的に記録するようになりました。まだ、国語では平仮名の学習をしているところでしたが、観察カードを書くために平仮名を覚えることは必要なタスクとなり、学習した平仮名を使って書くことで、平仮名の定着度も向上しました。

毎日その変化を確かめようと、子供たちは朝も帰りもアサガオの様子を確かめに行きました。変化を見つけては記録し、アサガオの特徴と合っているかどうかを確かめました。花が咲き、その特徴からクラス全員で、「アサガオだった」と結論を出してからも、子供たちは、観察を続け、変化を探し続けました。



#### <概念的理解 (Making conclusion) >

この探究を通して、子供たちは、植物の様子や変化、また、変化の順序や植物のサイクルにまで気が付くことができました。そして、観察することによって詳しく知ることができたと実感していました。自然の仕組みを理解するうえで、観察は有効な方法であり、観察には様々な視点があることを理解できました。

総括的評価課題として、自分の観察カードを振り返り、様子や変化について伝える説明文を作成しました。国語で学習した説明文の型を使って、観察から分かったことを文章にして表現しました。

セントラルアイデア、また、教科の枠をこえたテーマについて、その子供たちの発達段階に合わせた概念的理解に辿り着くことをゴールとしますが、当然、先に示した生活科の

評価規準に示された理解をしていることが前提となります。アサガオの栽培を通して、特徴や変化に気づくこと、よりよく育つための栽培方法や世話の仕方を自分たちで考え、実践し記録したこと、そして、最後まで栽培に関心を持ち、観察を続けながら大切に育てたことから、十分に到達することができていたと考えられます。また、各教科の学習に、意味や価値を持たせることにもつながっています。国語の文字や説明文の学習や、算数の数の数え方の学習は、探究の中で活用することにより、学びの文脈の中で、探究をより良く進めるために必要だと感じながら学ぶことができていました。

PYP の探究は、教科の枠をこえた学びですが、教科の学びが重要な役割を果たします。そして、各教科の学びを概念的理解に向けて活用、発揮していくことで、教科の垣根をこえて横断的に学ぶことができる有効な学習方法であると考えられます。

## 4-2. カリキュラム編成例2

### 4-2-1. 学習指導要領との整合性を図る～PYPの探究プログラムの作成～

6つの教科の枠をこえたテーマに基づいた探究ユニットを軸に、一年間のカリキュラムを構成しています。これは、多くの学校で行われているカリキュラム編成と大きく異なることはありません。当然ながら教育目標や目指す子供の姿などを踏まえて計画は立てますが、加えて学校長が示す教育方針も含めながら作成をしています。この教育方針の違いが各学校でのPOIの違いに結び付くのだと思います。また一条校のPYP校において各学年の探究ユニットを設計する段階に重要になるのが学習指導要領の存在です。日本型教育の中にIBの考え方を導入しようとするとしてもこの学習指導要領を無視するわけにはいきません。従来、学習指導要領は各教科の内容を系統的に構成し、子供の発達段階に応じて有効に学べるように研究されています。そのためIBで重視される教科の枠を超えた探究プログラムという視点でユニットを作成しようとする、系統的に構成された内容をどのような配置でどのように構成したらよいか大きな問題になってきます。POIでは、セントラルアイデアや学習者像等に加え、探究の流れやATLなど、IB独自のカリキュラム構成に必要な要素を使って作成しなくてはなりません。このように学習指導要領との整合性が一条校でのカリキュラム編成においては重要な視点になるのです。具体的には各教科の学習を、教科横断の視点に立ってつながりを考えながら単元の配列表を作る必要があり、それはUOIを軸にどのような意味や価値をもってつなげていくかを十分に検討して作成します。

#### ①教科の枠をこえた探究プログラム (POI)

## 教科の枠をこえた探究プログラム (POI)

2024 April~2025 March YGES Programme of inquiry

	私たちがどのように世界と時代に関わっているのか Where We Are in Place and Time	私たちがどのように自分自身を表現するか How We Express Ourselves	私たちが自分たちをどう組織しているのか How We Organize Ourselves	世界はどのように責任を負っているのか Who We Are	この世界を共有するということ Sharing the Planet	私たちが誰なのか Who We Are
教科横断的テーマ transdisciplinary theme	持続的・発展的な世界、個人と社会、国家・人間関係、人類の発展・探検・移住、地域及び地球規模から見た個人と文化の関係や相互関連の探究	時間・空間・物質・文化・信念・態度を、知って表現する方法、過去を振り返り想像力を伸ばし、美を賞賛することの探究	人間性や他者の存在とコミュニティの関わり、組織の構造や役割、社会的意思決定、経済活動とそれが人間や環境に及ぼす影響についての探究	自然現象とその説明、自然現象の科学的・社会的・人間的な相互作用、人間がどのように科学的法則を利用するか、科学技術の発展が社会や環境に及ぼす影響の探究	限りある資源を他の人々と共有物と共有することの倫理的責任、コミュニティ内及びコミュニティ間の人間関係、機会均等、平和と紛争解決の探究	社会的責任、信念と価値観、個人的・身体的・社会的・精神的健康、家族・友人・コミュニティ、文化を他と人間関係、権利と義務、人間であることの探究
タイトル Title	『山梨学院小学校を知ろう』	『ユージープロジェクト』	『ユージープロジェクトinYGES』	『Sharing the Autumn』	『World Project~日本と世界~』	『サミットプロジェクト』
実施期間	4月上旬~5月上旬	5月上旬~6月上旬	6月中旬~8月上旬	9月~11月上旬	11月中旬~1月中旬	1月中旬~3月上旬
中心的アイデア Central Idea	人々は、さまざまな場所や人と関わって、生活している	人々は表現の工夫により文化とながらうことが出来る	人々は組織の一員として役割を果たしている	人々は誇りのゆたかな自然の恵みを保っている	世界にはいろいろな国がありそこには様々な文化の交流が行われている	学びを共有することで自分と世界の関係が広がる
IB学習者像 IB Learner Profile	・探究する人 ・心を繋ぐ人	・探究する人 ・パシフィックな人	・探究する人 ・コミュニティが出来る人	・知識のある人 ・考え人	・探究する人 ・貢献する人	・思いやりがある人 ・信念をもつ人
概念 Key Concepts	関連・特徴	原因・変化	視点・責任	関連・特徴	特徴・責任	機能・成長
関連概念 related concept	関係性・ネットワーク・構造	機序・結果・成長	行動・コミュニティ	季節・関係性	組織性・組織論	役割・成長
探究の流れ Line of Inquiry	①山梨学院小学校を知ろう ②ユージープロジェクトを知ろう ③よりよい関わり方を模索しよう	①ユージープロジェクトを知ろう ②探究の工夫を共有しよう ③集団の中で働きよう	①探究者や他者の役割を知ろう ②組織の工夫を共有しよう ③チームワークを共有しよう	①自然の恵みを知ろう ②自然の恵みを共有しよう ③自然の恵みを共有しよう	①日本と世界とを比較しよう ②日本の文化や価値を知ろう ③日本の文化を共有しよう	①世界の国々を知ろう ②世界の文化を共有しよう ③外国や家族と学びの機会を共有しよう
教科横断的テーマ transdisciplinary theme	この世界を共有するということ Sharing the Planet	私たちが自分たちをどう組織しているのか How We Organize Ourselves	世界はどのように責任を負っているのか Who We Are	私たちがどのように自分自身を表現するか How We Express Ourselves	私たちがどのように世界と時代に関わっているのか Where We Are in Place and Time	私たちが誰なのか Who We Are
タイトル Title	『Welcome Project』	『ユージープロジェクト』	『ユージープロジェクトinYGES』	『ユージープロジェクトinYGES』	『YAMAHAプロジェクト』	『サミットプロジェクト』
実施期間	4月上旬~5月上旬	5月上旬~6月上旬	6月中旬~8月上旬	9月~11月上旬	11月中旬~1月中旬	1月中旬~3月上旬
中心的アイデア Central Idea	よりよいコミュニティをつくることで世界を広げる	目的を達成するために組織の中で人々は役割を果たす	人々は組織の一員として役割を果たしている	人々は誇りのゆたかな自然の恵みを保っている	世界にはいろいろな国がありそこには様々な文化の交流が行われている	学びを共有することで自分と世界の関係が広がる
IB学習者像 IB Learner Profile	・思いやりがある人 ・コミュニティが出来る人	・探究する人 ・パシフィックな人	・探究する人 ・コミュニティが出来る人	・知識のある人 ・考え人	・探究する人 ・貢献する人	・思いやりがある人 ・信念をもつ人
概念 Key Concepts	関連・特徴	原因・変化	視点・責任	関連・特徴	特徴・責任	機能・成長
関連概念 related concept	関係性・ネットワーク・構造	機序・結果・成長	行動・コミュニティ	季節・関係性	組織性・組織論	役割・成長
探究の流れ Line of Inquiry	①山梨学院小学校を知ろう ②ユージープロジェクトを知ろう ③よりよい関わり方を模索しよう	①ユージープロジェクトを知ろう ②探究の工夫を共有しよう ③集団の中で働きよう	①探究者や他者の役割を知ろう ②組織の工夫を共有しよう ③チームワークを共有しよう	①自然の恵みを知ろう ②自然の恵みを共有しよう ③自然の恵みを共有しよう	①日本と世界とを比較しよう ②日本の文化や価値を知ろう ③日本の文化を共有しよう	①世界の国々を知ろう ②世界の文化を共有しよう ③外国や家族と学びの機会を共有しよう
教科横断的テーマ transdisciplinary theme	How the World Works	Where We Are in Place and Time	How We Organize Ourselves	Who We Are	Sharing the Planet	How We Express Ourselves
タイトル Title	『自然の世界』	『ユージープロジェクト』	『ユージープロジェクト』	『本の世界』	『マケウの世界』	『サミットプロジェクト』
実施期間	4月上旬~5月下旬	5月上旬~6月下旬	6月中旬~7月下旬	8月上旬~10月下旬	10月下旬~12月上旬	1月下旬~3月上旬
中心的アイデア Central Idea	自然現象や生物の仕組みは、人間社会と異なるものがある	人々は多様な文化や伝統を知りながら自分自身やコミュニティの能力を高める	人々は組織の一員として役割を果たしている	人々は誇りのゆたかな自然の恵みを保っている	世界にはいろいろな国がありそこには様々な文化の交流が行われている	学びを共有することで自分と世界の関係が広がる
IB学習者像 IB Learner Profile	・探究する人 ・心を繋ぐ人	・探究する人 ・パシフィックな人	・探究する人 ・コミュニティが出来る人	・知識のある人 ・考え人	・探究する人 ・貢献する人	・思いやりがある人 ・信念をもつ人
概念 Key Concepts	原因・変化	原因・変化	視点・責任	原因・変化	特徴・機能	機能・成長
関連概念 related concept	原因・変化	原因・変化	視点・責任	原因・変化	特徴・機能	機能・成長
探究の流れ Line of Inquiry	①身の回りの自然 ②自然の仕組み ③多様な自然との関わり	①自分自身の表現・言葉 ②探究の工夫 ③共有する喜び	①必要な役割 ②自分自身で出来ること ③集団に貢献する働き	①本の世界 ②好きな作品を見つける ③自分を表現する	①生活の中のマーク ②マークに込められた思い ③思いをマークに表す	①物事をしたい ②まじめな努力の仕方 ③仲間と学びの機会を共有

IB では教科の枠を超えた探究プログラム (POI) の作成にあたってはどのような探究が望ましいか明確に定義を打ち出しています。「学習と指導」の手引書によれば、「教科の枠を超える」意味について3種類の学習に分けて定義しています。

一つ目が Interdisciplinarity (学際性) です。これは「知識、方法、概念、モデルを一つの学問領域から別の学問領域へつなぎ、転移すること」としています。ある教科の学習内容が他の学習内容と結びついて新しい知見が得られるようなものです。それを IB では料理に例えて「シチュー」のようだとし、材料を部分的に見てとれる学びとして「学際的な学び」と呼んでいます。

二つ目は, Multidisciplinarity (多領域性) です。「一つの学問領域だけでなく、複数の学問領域を同時に」学ぶことです。これは学問領域の境界は存在し、料理で例えるなら「ミックスサラダ」と紹介しています。つまり、サラダという一つの料理の中に材料は別々のままで個別に見てとれるようなものとして、これを「多教科的な学習」と呼んでいます。それは教科内容とスキルで始まり、終わるものと同様だと説明しています。日本では総合的な学習の時間などで一時期注目されたクロスカリキュラムに近いものとして考えると分かりやすいかもしれません。

三つ目は Transdisciplinarity (超領域性) です。「学問領域間にあり、様々な学問領域を横断し、かつ同時に全ての学問領域をこえるもの」と定義しています。それはもはや学問領域の区別は不可能であり、例えるなら「ケーキ」のように材料の形は、既に出来上がった時は異なるものに見えます。

IB が目指す教科の枠を超えたプログラムとは基本的に三つ目の「超領域性」のような探究学習が望ましいということが手引書からも読みとれます。前述のように学習指導要領を

学ぶ必要がある一条校においては、この超領域性の学習を作ることは容易なことではありませんが、カリキュラム構成の工夫によっては、なんとか近づけることも可能ではないかと考えています。

以下では、これらの定義をもとに作成した POI を紹介します。これは 2024 年度版の 1～3 年生の 6 つのユニットを一年間分として配置したものです。各学年別に色分けをして見やすくしているほか、実施期間なども明記して活動への目安をもって取り組むようになっています。

## ②教科をこえた学びを実現する UOI

ここでは、①で説明したような探究学習の種類と定義を意識しながら作成した UOI を例として紹介します。ユニットも他の一条校と同様に各教科のどのような内容を探究学習と結びつけていくかを考慮しながら作成されています。

### <Multidisciplinarity (多領域性) としての探究学習>

一つ目は 2024 年度の UOI で本校の代表的なユニットである「スポーツプロジェクト」のものです。

このユニットのタイトルは 1 年から 6 年まで共通で、学習内容も「スポーツ」を視点として構成されています。ただし、当然のことですがセントラルアイデアや学習者像は学年によって異なり、学年別に異なる学習が行われます。次の表は 6 年生のプランナー例です。

この探究学習のスタイルは先の定義から考えると各教科の学習内容がはっきりしていながらも、スポーツのフェスティバルという大きな活動へと向かっていくことから本校では、Multidisciplinarity (多領域性) の学習であると捉えています。関連概念と教科の項目にあるように、理科や社会、国語という教科の内容を学習指導要領とつなげて探究するようにしています。

### Transdisciplinarity (超領域性) としての探究学習

#### Grade6 Unit2

#### Sports Project

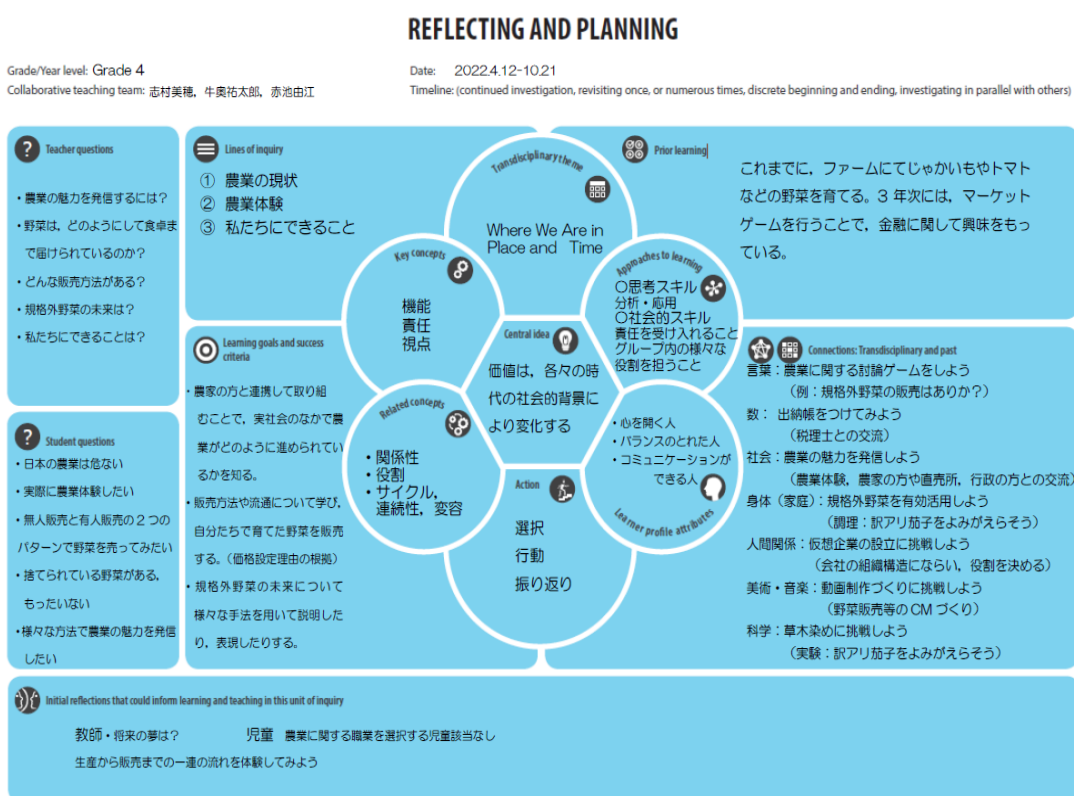
期間 Date	2024 年 4 月 8 日～2024 年 5 月 31 日	担当者 Teaching team member	
教科の枠をこえたテーマ Transdisciplinary theme			
私たちはどのように自分を表現するか How we express ourselves	アイデア、感情、自然、文化、信念、価値観の見解と表現/私たちは自分の創造性をどのように振り返り、発展させ、楽しむのか、 私たちはどのように美を鑑賞するのか		
セントラルアイデア Central idea			
「複数の立場や視点から物事を捉えることは、自身の能力を活かすことにつながる」			
探究の流れ・キーコンセプト Lines of inquiry・Key concepts		探究を促す教員の問いかけ Teacher questions	関連概念と教科 Related concepts and subjects
LOI1 テーマとの出会い LOI2 スポーツにおけるテーマ表現 LOI3 テーマの体現 Key concepts ・視点/Perspective ・機能/Function ・関連/Connection	<ul style="list-style-type: none"> <li>古代中国について自分が興味を持ったことは何か、興味を持ったものについて調べ、発表してみよう。</li> <li>古代中国の世界観をスポーツで表現するために必要な準備とは何か考え、制作してみよう。</li> <li>どうしたら競技者が表現しやすく、観客にはわかりやすい競技や振り付け、人や物の配置、工夫になるのか、考えてみよう。</li> <li>古代中国について、スポーツやスポーツフェスティバルの運営を通して、自ら表現してみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人や動物の体 (理科)</li> <li>弥生時代 (社会) 稲作の伝来</li> <li>平安時代 (社会) 国風文化の中国との比較</li> <li>スポロ作文 (言葉) 表現を工夫して作文を書こう</li> <li>日本音楽 (音楽) 雅楽</li> <li>競技、表現づくり (体育)</li> <li>ポスター、ロゴデザイン (美術)</li> </ul>	
学習の目標 Learning goals (LG) (探究の流れの具体化)		成功基準 Success criteria (SC) (ルーブリックから引用)	
<ol style="list-style-type: none"> <li>テーマ「古代中国」について探究する。 古代中国について調べて発表し、他の発表を聞くことでより多くの知識に触れる。</li> <li>テーマ「古代中国」を自身の係から複数の視点で捉え、スポーツと融合させながら表現する。 1～6 年までの競技者や観客など様々な視点から考え、準備を進める。テーマである「古代中国」の世界観をどのように表現し、伝えるかを吟味する。</li> <li>運営者として、また競技者として、テーマ「古代中国」を表現する。 スポーツフェスティバル当日、準備してきたことを信じて「古代中国」を表現する。</li> </ol>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1-1. テーマ「古代中国」に関して興味をもったものについて調べ、パワーポイントを活用しながら発表する。</li> <li>2-1. 他の係や学年と協力して運営、準備をする。</li> <li>2-2. 自身の考えに自信を持ち、他者の考えにも耳を傾けながら決断する。</li> <li>2-3. 他学年や観客の立場に立って考え、よりよくなるための方法や工夫を探究する。</li> <li>3-1. 自信を持って自己表現する。</li> </ol>	

## 4-2-2. PYP 探究ユニットの実践例

2022年に金融教育をテーマに行った Transdisciplinarity（超領域性）の探究学習の実践例を紹介します。一見すると社会科の内容のようですが、実際の活動は金融をテーマにした活動になっており、教科としては明確に分類できない内容になっています。具体的には、お金の計算やお店の看板制作、野菜づくりなどが行われ、最終的には野菜販売という活動に集約されています。この項目では、各学年の UOI（旧型）をもとに子供の姿も交えて紹介します。

まずは、各学年でどのような活動を行ったのかを示します。下の図はこの教育で目指した子供たちに身に付けさせたい力です。この図だけでは日本型教育の内容に見えますが、このような基礎的な研究内容がもとになってプランナーが作成されました。この方向性が明確であったからこそ、当時、教師は何を目指すかが分かり、PYP としてのプランナー構成もしやすかったと思います。学習指導要領の内容との結び付きを考えたときにこのような研究構造を示す図を先に作っておくとユニットシートも少しは楽に作成できるかもしれません。次に全校で取り組んだ金融教育の活動からユニットとの結びつきを考えてみます。

### Reflecting and Planning の例



上図のように各学年では金融という全校テーマが設定されているものの活動が全く異なるものが計画されています。さらに具体的な教科の枠というものが活動全体を通しても見えにくいものであったため Transdisciplinarity（超領域性）の探究学習として考えやすいものだったと捉えています。

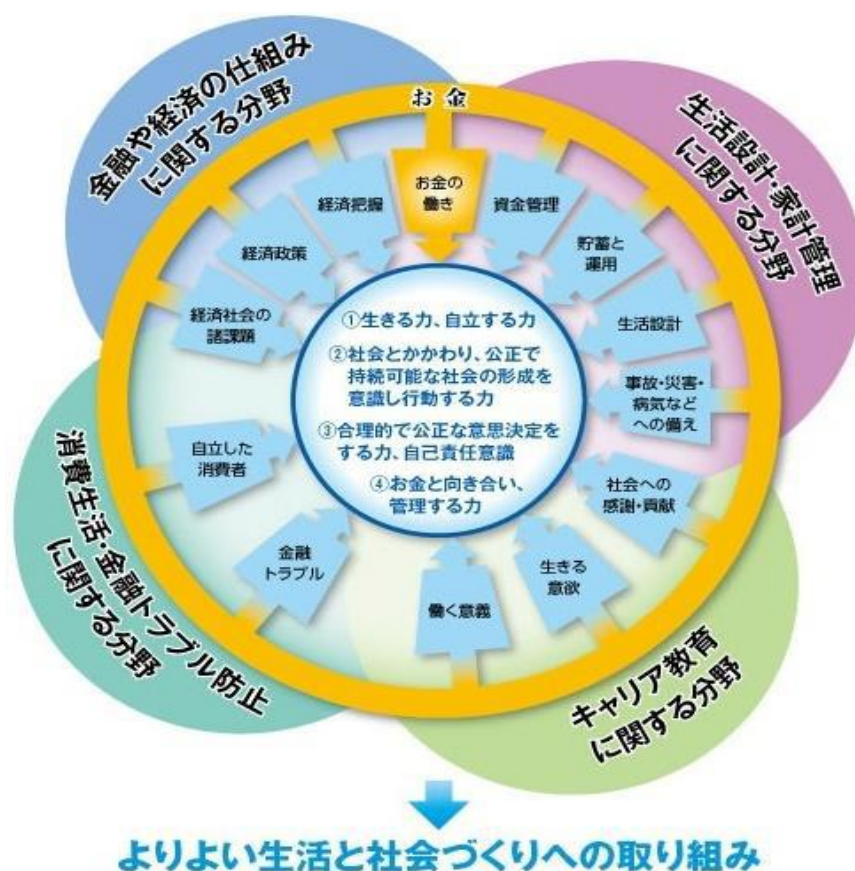
次に4年生の「野菜販売所づくりに挑戦」という活動を具体的に紹介したいと思います。

#### 4年生の「野菜販売所づくりに挑戦」

<導入 (Tuning in) >

子供たちの農業に関する意識の調査から導入しました。まずは農業に対するイメージを聞いた上で、実際に若くして農業を営んでいる方の話を聞くところからのスタートでした。一般的に農業の学習では農業の衰退などの社会現象をもとにすることが多いですが、農業そのものに対するイメージから導入し、自分たちの年齢に近い農業経営者の話から、「たいへんそうなイメージしかないのに、どうして農業をやるのだろうか」という素朴な疑問を抱き探究活動がスタートしました。

いろいろと考えてはみたものの、最終的には「実際に農業をやってみないと分からない」という結論になり、農業経営者の畑をお借りして自分たちで野菜を作る活動へと徐々に発展していきました。



## 1・2学年「開店 山梨学院小商店街」

喜びや幸せを大切に商品づくりやサービスの提供を通して、社会とのつながりやお金の大切さを学ぶ

## 3学年「いざという時、おいしい保存食品開発」

自分たちで材料を仕入れて、保存食品の商品開発を進めるなかで、働くことへの関心をもつ

## 4学年「野菜販売所づくりに挑戦」

野菜の生産、仕入れから販売活動までを体験することを通して、経済の仕組みに関心をもつ

## 5学年「金融・経済博物館をつくろう」

金融や経済を身近に感じ、お金のトラブルから身を守る力がつくような情報発信をする

## 6学年「起業プランコンクールに挑戦」

社会に役立つ商品やサービスの構想を通して仲間共に夢を描き、現実に向けて努力する態度を養う

<展開 (Finding out → Sorting out) >

まず学校の畑で自分たちで夏から秋にかけて収穫できる野菜（ナス、トマトなど）を作ってみました。しかし、作り方のコツも分からず草や虫害での生育不足を経験したため、最初に話を聞いた農業経営者の方によりよい作り方をレクチャーしてもらいました。すると追肥や枝の剪定などを学び、生育の良い野菜をたくさん収穫できるようになりました。

自分たちで食べきれないほどになったことから、販売方法を考えました。結果毎日スーパーに持っていくことも不可能なことから自分たちで学校に無人販売所を設置して販売したらどうかという結論になりました。目的も持った子供たちは各自で販売するための係を立ち上げ、販売所を制作し、金銭の計算や出納帳のつけ方、値段設定、流通の仕組みを学んでいくことができました。

野菜は、学校近くの方や保護者に呼びかけて販売することができ、毎日完売になりました。



<概念的理解 (Making conclusion) >

最終的にはこの活動を保護者の皆さんに参観日に来ていただき、そこでも販売活動を行いました。この活動を通して農業という労働の苦労や工夫だけでなく、その仕事の大切さを知ることができました。

さらに、様々な原材料が世界の出来事と結びついていること、販売しても収益は原材料費に対しては黒字になったものの人を雇用することは難しいという内容まで理解を深めることができました。無人販売所の制作や経営活動を通し、社会的なことだけでなく国語や算数、理科や家庭科などの教科要素を含んだ活動が様々な形で展開されました。

「価値は各々の社会的背景により変化する」というセントラルアイデアに触れる機会が多くあったと思っています。このように教科の枠にとられない大きなテーマ（今回なら金融）を設定し、教科内容がどのように結びつくかを考慮しながらプランニングすることで、IBが求める探究学習に近づいていくのではないかと考えます。



### 4-3. カリキュラム編成例3

#### 4-3-1. 学習指導要領との整合性を図る探究プログラムの作成

①	②	③	④	⑤	⑥
Grade 1 How We Express Ourselves	Shaping the World	Where We are in Place and Time	Who We Are	How We Express Ourselves	How We Share the World
Grade 2 How We Express Ourselves	Shaping the World	Where We are in Place and Time	How We Express Ourselves	Who We Are	How We Share the World
Grade 3 Who We Are	How We Express Ourselves	Shaping the World	Where We are in Place and Time	How We Share the World	How We Express Ourselves
Grade 4 Who We Are	Shaping the World	How We Express Ourselves	How We Share the World	Where We are in Place and Time	How We Express Ourselves
Grade 5 How We Express Ourselves	Shaping the World	How We Share the World	Where We are in Place and Time	Who We Are	How We Express Ourselves
Grade 6 How We Share the World	How We Express Ourselves	Where We are in Place and Time	Who We Are	How We Express Ourselves	Shaping the World

英数学館小学校の教育は、英語イマージョン教育と国際バカロレア（PYP）教育という二つの柱で構成されています。多くの PYP 認定校が日本語でプログラムを実施する中、本校のアプローチは極めて異色であると考えています。しかしながら、学習指導要領を遵守しつつ、主に英語で PYP を中心とした探究プログラムを設計しました。教科と教科をつなぐ POI（探究のプログラム）の作成は、非常に骨の折れる作業でした。

以下に、本校の POI の一部をご紹介します。

POI は、6つの超分野的テーマに沿って、6学年分の探究テーマをバックキャスト（逆向き設計）で作成します。例えば、『私たちは誰なのか（Who we are）』のテーマでは、1年生が家族や友人について探究する一方で、6年生では社会や世界へと探究内容が広がるように設計されています。実際に、本校の他のテーマについても例をいくつか挙げてみます。

< 1年生 >

テーマ：Where We Are in Place and Time（私たちはどのような時代と場所にいるのか）

セントラルアイデア：公共の空間は、人々がつながる機会を提供する

主要概念（Key Concepts）：Form（特徴）、Connection（関連）、Function（機能）

探究の流れ（Lines of Inquiry）：

- コミュニティにある様々な公共の空間（特徴）
- 公共の空間がコミュニティの人々にどう役立つか（機能）

- 人々はどのように様々な場所を利用するのか（関連）

#### < 2年生 >

テーマ：Where We Are in Place and Time（私たちはどのような時代と場所にいるのか）

セントラルアイデア：「お祝い」は、共有された信念や価値観を反映する

主要概念（Key Concepts）：Form（特徴）、Causation（原因）、Connection（関連）

探究の流れ（Lines of Inquiry）：

- お祝いとは何か（特徴）
- 人々はなぜ祝うのか（原因）
- お祭りの意味と特徴（関連）

#### < 3年生 >

テーマ：Sharing the Planet（この地球を共有するということ）

セントラルアイデア：人々は、様々な方法で自然環境と相互に作用し合い、利用し、尊重する

主要概念（Key Concepts）：Responsibility（責任）、Connection（関連）、Change（変化）

探究の流れ（Lines of Inquiry）：

- 過去を知るための方法（変化）
- 環境の中にいる生き物（関連）
- 地域の環境に役立つまたは害となる行動（責任）

#### < 4年生 >

テーマ：How We Organize Ourselves（私たちは自分をどう組織しているのか）

セントラルアイデア：コミュニティは、人々のニーズに合うように考案された相互接続のサービスを提供する

主要概念（Key Concepts）：Responsibility（責任）、Change（変化）、Connection（関連）

探究の流れ（Lines of Inquiry）：

- 災害と事故
- 災害に対する備えと事故の防止（変化）
- 安全を守る緊急対応サービス（責任）
- 緊急対応サービス間の連携（関連）

#### < 5年生 >

テーマ：How the World Works（世界はどのような仕組みになっているのか）

セントラルアイデア：天候が人々の生活や環境に影響を及ぼすことがある

主要概念（Key Concepts）：Causation（原因）、Change（変化）、Responsibility（責任）

探究の流れ (Lines of Inquiry) :

- 天気の変化する要因 (原因)
- 天気が環境に及ぼす影響 (変化)

< 6年生 >

テーマ : Where We Are in Place and Time (私たちはどのような時代と場所にいるのか)

セントラルアイデア : 文化や社会の間の相互関係には様々な特徴がある

主要概念 (Key Concepts) : Perspective (視点) / Form (特徴) 、 Causation (原因) 、 Change (変化)

探究の流れ (Lines of Inquiry) :

- 世界中の文化や社会 (視点、特徴)
- 社会を形成する思想や技術の効果 (原因)

このように、学年が上がるにつれて概念の形成に基づきテーマの対象が広がっていくように設計しています。本校では、学習指導要領に準拠する形で各ユニットを設計しており、探究学習を以下のように実施しています。

- 1～2年生 : 生活科の時間をベースに、算数や国語などの時間も活用しながら、それぞれのテーマに沿った教科横断型の学習活動として UOI を実施しています。
- 3～6年生 : 総合的な学習の時間をベースに、理科や社会といった教科の中から関連する領域を選びながら、6年間のユニット設計を行っています。

また、本校は英語イマージョン教育を導入している関係上、外国人教員や担任と週1回、学年ミーティングを実施し、ユニットの進行状況を確認しながら、相互にフィードバックを行っています。多忙な教員同士が意見を交わす時間を確保することは容易ではないため、週に1日、児童が早く帰る日を設け、全体の PYP ミーティングを行う時間を確保しています。

#### ①PYP に求められる5つのスキル (学習へのアプローチスキル)

UOI の探究活動を通して、児童が獲得することを目指す5つの ATL スキルがあります。これらのスキルは、個々の児童によって習得度合いに差が見られる上、定量的な評価が難しい定性目標であるため、その習得度を測ることは容易ではありません。しかしながら、PYP プログラムを実施している全ての学校が、これらのスキルの育成を重要な目標として掲げています。なぜなら、これらのスキルは子供たちが成長し学習を深める中で、そして将来社会に出てからも常に求められる汎用的な能力であるからです。そのため、これらのスキルが自然に育まれるようなユニットプランを設計し、探究学習を進めていくことが不可欠となります。

PYP に求められる 5つの ATL スキル



②国際バカロレア 10 の学習者像

IB では PYP・MYP・DP を通して理想の学習者像の定着を目指しています。この学習者像も定性目標なので、数値化などできず、生涯学習のベースとなるものです。本校では学習者像の浸透・定着に向けて以下のような活動をしています。

10 の学習者



<毎週の学習者像>

各クラス、朝の会と帰りの会で目標とする学習者像について意識づけと振り返りを行っています。

<毎月の学習者像>

毎月の集会で各学年が目標とする学習者像についての発表をしています。児童間で生活上の指導が必要な場合、例えば喧嘩が起きた場合など「あなたのその行動・言動は思いやりがありますか?」「あなたのその行動はオープンマインドですか?」など常に学習者像を思い起こし、いつも身近に考えるよう指導をしていきます。

特定概念 (Specified Concepts)



これらは、高次思考をサポートし、セントラルアイデアに関連する知識を様々な方法で検討するための視点を提供するものです。7つの特定概念はユニットプランにバランスよく組み込む必要があります。これは学習者像についても同様です。私が先にお示ししたユニットプランには、これらの特定概念が含まれています。

<英数学館小学校 探究モデル図>

本学では、児童と保護者が探究学習を理解しやすいよう、右のサイクルをモデルとして提示しています。

学習はまず、児童が「疑問を持つ」ことから始まります。その疑問から「調べる活動」へと移行し、自身の疑問（仮説の誤りなど）から「発見」をします。そして、実験や調査を通じて疑問を解消していきます。最終的に「振り返り」を行い、自己の学びを深め、次の学習へとつなげます。この探究サイクルを繰り返し行うことで、UOIを推進しています。



#### 4-3-2. ユニットプラン実践例

< 6年生 >

テーマ：How the World Works（世界はどのような仕組みになっているのか）

探究のテーマ：科学原理の理解を人間がどのように利用しているか

セントラルアイデア：人類は発見した原理を活用し、より良い未来を創造するための知恵を生み出す目指したい子供の姿（ゴール）：このユニットを通して、子供たちは科学原理が日常生活にどのように応用されているかを理解し、持続可能な未来のために新たな技術や解決策を考案できるようになることを目指します。

探究の流れ（Lines of Inquiry）：

Line 1：身近な科学原理とそれを活用した道具や技術の探究

探究の視点：原因から変化へ

- 原理の発見：「それってどうしてそうなっているの？どんな仕組みでそうなるの？」
- 原理の活用（応用）：「それを使って何がつくれるの？」

Line 2：人々の知恵の探究

探究の視点：より良い未来を創造する視点

- 「原理をどうやって利用する？私たちの生活のどの部分に活かされているの？」  
（例：熱エネルギーでお湯を沸かす、洗濯機がなぜ動くのか、冷蔵庫はなぜ冷えるのか）
- ATLスキル（Approaches to Learning Skills）：
  - コミュニケーションスキル
    - 「聞くスキル」：相手のものの見方や考え方に積極的に耳を傾け、必要に応じて説明を求めることができる。  
⇒どこに注目して聞くべきか、友だちから得た情報を次の学びのどこに活かすのかを意識し、互いに聞き合う活動を工夫する。
    - 「解釈するスキル」：イメージしていることと言語がどのように相互作用してより良くアイデアを伝えるのか理解する。  
⇒原理を知恵に応用する際、どの原理をどのように理解し、それを転移させるのかを、絵や動き、文章などで正確に伝えられるように工夫する。
    - 「話すスキル」：アイデアや知識について、仲間や教師と討論・協議する。相手意識を持って、自分の見つけた原理や作り出した発明について詳しく説明する。  
⇒自分が取り組む探究活動にも、相手が取り組む探究活動にもそれぞれ関心を持って耳を傾け、相手の探究が深まるような質問や適切なアドバイスをを行う。

## 第5章 学内外コミュニティとの連携

### 5-1. 学内外コミュニティとのあり方

PYP の探究をより良いものとするために、学校コミュニティ、そして学校外のコミュニティとの連携が大切になります。といっても、特別なプログラムを組むというわけではなく、保護者に協力していただいたり、社会科見学に行ったり、地域の企業や公共団体に学びに関わっていただいたりするといった、これまでの学校教育の中で行われてきた関わりが大切です。ただ、PYP において欠かせないのは、学びに深く関わっていただけるように、事前に子供たちの学びについて知っていただき、学びの文脈の中に入り込んでいただくように計画することです。つまり、学習者の一人として、共に学びに関わっていただくことが重要です。

導入の段階や、視点を変える機会、概念的理解を導く段階において、専門家の話を聞いたり、本物に触れたりすることは、子供たちにとって、学びを深める重要な機会となります。探究を計画する段階で、どのような連携が可能か、学びを発展させる可能性があるのかを模索し、協力依頼をし、ミーティングを重ねていきます。事前、当日、そして、事後の関わりまでを考えていきます。

### 5-2. 学内外コミュニティとの連携の事例

#### ①地域の一般社団法人との連携

<3年生>

テーマ：Where we are in place and time (私たちはどのような場所と時代にいるのか)

セントラルアイデア：周囲の環境を生かしてまちはつくられる



3年生の社会科の「わたしたちのまちと市」を軸とした地域学習のユニットにおいて、学校のある草薙の町づくりを担う団体との連携をしました。

このユニットは、身近な地域の人々の生活と地理的環境を関連付けながら、課題を把握し、その解決に向けて社会への関わり方を考えるユニットです。学びの文脈において、必要性を感じながら方位や記号などの事実に知識や地図の読み取りなどの技能を学び、それを活用しながら身近な草薙のまちの現状を把握し、良い点を確認するとともに、より良いまちにするための課題を明らかにしていきました。

このユニットでは、ユニットの初めから草薙のまちづくりに取り組む一般社団法人草薙カルテッドと協働し、ユニットの初めから最後まで学びに関わっていただきました。ユニットの序盤では草薙のまちの特徴について話をしていただき、中盤ではまちづくりとはど

うということか、誰がまちづくりを担うのかといった話をさせていただきました。総括的評価課題では、3年生でもできる「まちづくり」の提案を作成し、草薙カルテッドの働きかけで、市職員や自治会長、商店街の方を招き、まちづくりのアイデアを伝える機会を設けることができました。自分たちもまちに関わり、まちをつくる一人として社会参画する価値を学ぶことができました。

## ②地域企業との連携

<4年生>

テーマ：Where we are in place and time（私たちはどのような場所と時代にいるのか）

セントラルアイデア：地域の特徴が文化を創り続ける。



4年生の社会科「わたしたちの県」を軸に、地理的な特徴と文化的な背景によって、それぞれの地域に発展する産業が決まり、その産業の発展が地域を特徴づけ、文化を形成することを概念的に理解することを目指したユニットです。

このユニットの導入で、静岡県的主要な産業であるプラモデルの生産を行っている株式会社青島文化教材社と連携し、プラモデルがなぜ静岡県の主要な産業となったのかを、地理的な特徴と歴史的な背景からお話をさせていただきました。また、講演の後、実際にプラモデルを組み立てるプログラムを準備させていただきました。同じく静岡県の産業である雛人形のプラモデルに、お茶染めの布の衣装、襟の部分は実際のひな具と同じものが組み込まれており、静岡には様々な産業が発展していることを教えていただきました。

この導入をいかして、静岡県の地理的な特徴を確かめ、静岡県ではどのような産業が発展しているのか、また、なぜその産業が始まり、今も、これからも続いていくのかを地理的特徴と歴史的、文化的な背景と関連付けて確かめることができました。

## 第6章 PYP の評価

### 6-1. PYP における評価の目的

PYP における評価の目的は、学習と指導の両方に情報をもたらすことです。児童の学習についての情報を収集・分析し、それを指導において活用することで、児童のより良い学びを促進することにつながっていきます。そのために、学習後の成果だけを問うのではなく、学習のプロセスの様々な段階で、児童が何を知っているか、何を理解しているか、何ができるのかといったことを特定していきます。それを児童や保護者と共有し、次のステップにつなげていくことが、評価の価値になります。

「学習と指導」(IBO, 2018)によれば、効果的な評価は、児童、教師にとって次のような効果をもたらすと示されています。

1. 児童：能動的に評価に関与し、建設的なフィードバックを受けて行動に移すことで、自己調整のできる効果的な学習者になる。
2. 教師：児童が何を知っているのか、そして、何ができるのかを継続的に学ぶことで、より効果的な指導を行うことができる。

このように、児童の学びの促進に向けて学習と指導の両方に意味のある評価であるべきなのです。つまり、学習指導要領でも言われる、学習者のための評価の具体であると考えられます。

### 6-2. 評価内容と方法

評価すべきことは、①概念的理解、②ATL、③知識、④学習者像の発達などが考えられます。そのために、評価規準は、常に児童と共有しておくことが大切になります。静岡サレジオ小学校では、探究ユニットをスタートするときに、ポスターの形でUnitの評価規準を示すようにしています。それぞれの評価規準については、課題や活動にむけてルーブリックを作成し、その段階に示されるAの到達度を目指して取り組むように促します。

「学習と指導」（IBO, 2018）には、PYP の評価は、下記の図に示される通り、4つの領域が示されています。それは、学習のモニタリング、記録、測定、報告です。そして、それぞれの領域における評価が、学習と指導の両方に機能することが求められています。



その中でも、特に重視されているのが、学習のモニタリングと記録です。モニタリングに使われる方略としては、観察、問いかけ、ディスカッション、協働学習などがありますが、本校で最も重視しているのが振り返りとフィードバックです。

形成評価段階において、様々な学習の証拠を残していく際に、自己評価と振り返りを記録させていくことで、児童は、今自分が分かっていること、できるようになったこと、そして、次に何をすべきかを把握できるようになります。また、その自己評価や振り返りに対して、教師が次のステップに進むためのフィードバックやフィードフォワードを返すようにします。児童の学びを把握し、それぞれの学びの段階に応じて、自己調整のためのヒントとして、口頭で、またはコメントの記入の形で返していきます。結果として、フィードバックやフィードフォワードを受け、それをもとに、児童それぞれが学習目標や計画を立て、実践し、振り返ることで、個別最適な学びにつながると考えています。

測定については、課題や活動については、ルーブリック表を用いることが多いです。児童は、ルーブリックをもとに、自己評価を重ねることで、自己の学びを振り返り、今わかっていること、できるようになったこと、そして、次にわからなければいけないことを把握していきます。形成的評価課題では、教師のルーブリック評価も一つのフィードバックであり、学習を促進するものになります。総括的評価課題は、当然、ルーブリックに従ってユニット全体の学びの到達度を測るものとなりますので、そこまでの形成的評価における評価が重要になります。

「今日のふりかえり」児童の記述例

今日のふりかえり

じこひょうか～きょうのこども TOK は、かぎ(見方・考え方を上手に使えましたか)

よくできた      できた      ふう      あまりできなかった      できなかった

たのしかったこと・おもしろかったこと

しゃちょうの文をつくるのが、グループのみんなと話し合っ  
てつくるのがたのしかったです。

むずかしかったこと

へんかのかぎはつかいやすいけどこのとうぶん、ゴミのしやん  
だとむずかしかったです。(ながい文になること)

しんとかぎをつかいて考えることが、よくなりましたしうたわ

また、本校は教科の知識・技能を測定するために、市販のテストも活用しています。教科の学習の到達度を測ることが目的ではありますが、探究のプロセスにおいては、テストも形成的評価の一つですので、そこで得た知識・技能を探究において活用・発揮できるようにデザインしていきます。

報告に関しては、従来の通信表と、ユニットについてのレポートを出しています。通信表に関しては、左側を学習評価、右側を学習者像評価としています。左側の学習評価については、文部科学省から出されている3観点について、学習の評価をしています。右側は、学期で特に頑張った学習者像について、児童の自己評価と、それを受けた担任からのコメントで構成しています。ユニットについては、それぞれのユニットの概要、学習者像の発達、ATLの発達、概念的理解について文章で伝えています。報告は、児童、教師、保護者をつなぐ大切なものであり、学校コミュニティ全体として児童の学びの促進に関わるための重要な情報となります。

## 通信表とユニットレポートの例



〈PYP の評価を通して〉

### ①PYP における評価方法の多様性

1. ルーブリック評価：形成的な評価を重視し、児童と教師が成長を多角的に捉える。
2. 自己評価：児童自身が学習プロセスを振り返り、主体的な学習を促す。
3. ピア評価：児童同士で他者の良さを認め、自分の学びに生かす。
4. レポート（通知表）： IB 教育の理念と学習指導要領に示される内容の評価との整合性を図るために、それぞれの学校独自のレポートを作成する。

### ②評価を通して得られる効果

1. 児童の成長：児童の思考力、判断力、表現力、国際的な視野が養われる。＝深い学び
2. 保護者の理解促進：IB教育の理念を理解し、子供の成長を多角的に捉え、学びに関わり、学びの促進者となる。
3. 教員の専門性向上：評価に関する深い理解と、児童への効果的なフィードバック能力が向上する。

### 6-3. 評価方法の実践における課題と工夫

- ① 学校独自の評価規準の作成の必要性：一条校として、IB の理念に基づいた評価規準を設ける一方、従来の教科評価とのバランスをとる必要がある。
- ② 保護者への説明と理解促進：IB 教育の評価について、保護者にわかりやすく説明し、理解を得るための工夫と機会が必要である。
- ③ 教員の負担軽減：IB 教育の導入に伴い、教員の負担が増加するため、評価方法の効率化が求められる。（特にレポート作成について）
- ④ 児童の学びに対する主体的な態度の育成：児童が主体的に学習に取り組めるよう、自己評価を重視し、フィードバックを効果的に行う必要がある。＝評価の捉え方の転換

探究ユニットの総括評価課題で使用した評価規準の例

セントラルアイデア（概念的理解）とATL（コミュニケーションスキル）の評価

Rubric	A	B	C
Criteria ・段落構成 はじめ（1段落）、中（4段落）、おわり（1段落）の6段落で構成されている。	6段落で構成している。	5段落、もしくは7段落で構成している。	それ以外の段落数になっている。
・時を表す言葉 時を表す言葉を使って、時系列に沿って書かれている。	1～5段落の全てに時を表す言葉が使っている。	5段落のうち4段落で時を表す言葉が使っている。	5段落のうち3段落以下でしか時を表す言葉が使っていない。
・中の段落の構成 具体的な成長や変化を書いた文と、それがどのようなちえにつながるのかを書いた文が書かれている。	中の段落全てで、具体的な成長や変化を書いた文と、ちえを書いた文の2文を書いている。	3段落のうち2段落で、具体的な成長や変化を書いた文と、ちえを書いた文の2文を書いている。	3段落のうち1段落で、具体的な成長や変化を書いた文と、ちえを書いた文の2文を書いているか、もしくは書いていない。
・中心的アイデアの理解 大切な命・命をつなぐということ・そのためのちえの3観点について、自分が理解したことがおわりの段落に書かれている。	3観点全てについて、理解したことを書いている。	3観点のうち2観点について、理解したことを書いている。	3観点のうち1観点について理解したことを書いているか、理解したことを書いていない。

なお、上記のルーブリックは、国語の学習における評価とも重なるため、国語の教科として下記の評価にも活用ができます。

1. 「たんぼぼのちえ」

【知・技】

- ・ 順序など情報と情報との関係について理解している。

【思・判・表】

- ・ 「読むこと」において、時間的な順序などを考えながら、内容の大体を捉えている。
- ・ 「読むこと」において、文章の中の重要な語や文を考えて選び出している。

2. 「かんさつ名人になろう」

【知・技】

- ・ 身近なことを表す語句の量を増し、文章の中で使っている。

【思・判・表】

- ・ 「書くこと」において、経験したことから書くことを見つけ、必要な事柄を集めたり確かめたりしている。
- ・ 「書くこと」において、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えている。

【態】

- ・ 書くために必要な事柄を積極的に集めたり確かめたりし、今までの学習をいかして観察記録文を書こうとしている。

3. 「こんなものみつけたよ」

【知・技】

- ・ 句読点の打ち方、かぎ（「」）の使い方を理解して文や文章の中で使っている。

【思・判・表】

- ・ 「書くこと」において、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えている。

- 「書くこと」において、文と文の続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。

## 第7章 認定後に必要なこと

確認訪問を終え、正式に IB World School として認定された後は、それぞれの学校の環境に合わせた実践環境を整えていくことになります。PYP を本格的に実践していくうえで、IBO から求められる要件を各学校で満たしながら、どのように学校の実践を発展させるかを考えることになり、各学校の独自性と具体的なプランニングが試されます。

認定後、5年ごとに（初回は4年）IBO による評価訪問を受けることになります。評価訪問を受けるまでに、様々な取組を行い、学校コミュニティ全体として理解を深めながら準備を進めます。

以下、初回の評価訪問に向けて必要と考えられるプロセスを挙げます。詳しくは IB 文書「プログラム評価の手引き」を参照してください。

### ①PYP のプログラム実践

認定校として、本校は PYP の基準を満たしつつ、園児・児童のためにより良い探究学習を提供できるよう、学校全体でプログラムの実践に取り組んでいきます。特に一条校においては、学習指導要領との整合性を図り、教科学習の領域の充実を図りながら、各学校の文化を反映した PYP の実践が求められます。

このプロセスにおいて、以下の点に重点的に取り組み、PYP への理解を深めます。

- 学習指導要領の指導事項と PYP の要件を満たす形での、学校の文化を反映した PYP の探究の計画、実践、および振り返り。
- PYP 実践のための教員研修のプランニング（ワークショップ受講計画を含む）。
- 教育リソースの特定と充実（地域コミュニティとの連携強化を含む）。
- 学校図書館の学習センターとしての機能の充実。
- 「エキシビション」の実施（アーリーイヤーズ（幼稚園段階）のみの場合は必須ではありません）。

### ②自己評価と行動計画（アクションプラン）の策定

自己評価とは、評価年度中に学校が自ら実施する振り返りのプロセスです。自己評価を開始する前に、PYP 校は、PYP に関わる全ての教員が『プログラムの基準と実践要綱』の構造を理解することが非常に重要です。

この『プログラムの基準と実践要綱』は、「目的」「環境」「文化」「学習」の4つのカテゴリーに分けられています。この枠組みでは「学習」を中心に置き、IB の理念と学校の文脈がその周囲に配置されています。これらの4つのカテゴリーのもとには9つの基準が設けられ、それぞれの基準にいくつかの実践が含まれています。さらに、実践の下には要件があり、その要件の中にはプログラムごとの要素（仕様）を含むものもあります。



自己評価では、IB 資料である『プログラム基準と実践要綱』で定められた実践それぞれの要件全てについて、学校のプログラムが満たされているかを確認していきます。満たしていない要件を特定し、それをもとに、行動計画（アクションプラン）を作成します。

行動計画は、「PSP 2020 Action Plan」を使用して、特定した要件をどのように満たすかを記録していくものです。

### ③プログラム開発計画（Programme development plan）

自己評価で特定された課題について、学校全体で理解を深めるプロセスとして、プログラム開発計画に取り組む必要があります。以下に、『プログラム評価の手引き』からの引用を示します。

プログラム開発計画の策定は、学校が IB プログラムの認定を受けた直後から始まり、そのプログラムを実施し続ける限り継続されます。また、これは様々な形式をとることができ、そこにはその学校の文脈や戦略的目標が反映されます。新しいプログラム開発計画は、優先事項や戦略的目標が変化したと学校が判断した際に作成されます。学校は、プログラム評価の際に、プログラムの1つの側面に関する計画策定、実施、分析、振り返り、学習のエビデンスを提出するよう求められます。

次の例は、プログラム評価の焦点として選択することのできるプログラムの側面を示しています。

- 学習者（エージェンシー、「IBの学習者像」、奉仕・行動、学問的誠実性、心身の健やかさ）
- 学習と指導（ATL、「指導のアプローチ」、探究、概念的理解、地域社会の文脈とグローバルな文脈、チームワークと協働、アクセスと学習の多様性、インクルージョン、評価、カリキュラム、多言語主義とアイデンティティ）
- 学習コミュニティ（協働、国際的な視野、リーダーシップ、学習環境、テクノロジー）

学校は、これらの例を参考に、自己評価を反映させながら取り組む側面を決定し、『プログラムの基準と実践要綱』に示される少なくとも2つ以上の要素を根拠として、プログラム開発計画を立案し、学校全体で取り組んでいきます。

この取り組みは、プログラム評価のためだけでなく、学校コミュニティ全体として IB および PYP への理解を深めることや、教員の研修としても、取り組む価値のあるものとなります。

### ④各方針（ポリシー）の見直しから学校文化へ

認定の際に提出が求められる各方針（ポリシー）は、毎年改訂することが推奨されています。自己評価では、「文化」を担当するチームが主にポリシーの見直しを担当しますが、単にセクションとしての見直しにとどまらず、各ポリシーについて学校全体で理解を深め、やがてそれが学校文化として根付くことが重要です。

## 第8章 情報収集の仕方

どのプログラムにおいても、プログラムを実施する上で情報収集は欠かせません。認定校・候補校の数は増えてきていますが依然として数は少なく、例えば運営上の相談や教科実践例というガイドにのっている情報以上のことなどプログラムの発展には欠かせないものが多くあります。より具体的な事例についての情報収集は下記のリンクを始めとし、コーディネーターや教員、あるいは学校単位で外部との情報交換を積極的に行う必要があります。是非学校の置かれた状況を踏まえて情報共有の場を拡充するようにしてください。以下は参考までに記載します。

IB 情報の共有における一例	
文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム	<a href="https://ibconsortium.mext.go.jp/">https://ibconsortium.mext.go.jp/</a>
日本の IB 校に向けて様々な情報を発信しているポータルサイトです。	
IBO の問い合わせ先	<a href="mailto:support@ibo.org">support@ibo.org</a>
問い合わせ希望の際は上記アドレスまで。	
IBO ホームページ	<a href="https://www.ibo.org/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/">https://www.ibo.org/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/</a>
IB に関する日本語資料を掲載している IBO 公式情報内のページです。	
IB Association of Japan (IBAJ)	<a href="https://ibaj.or.jp/ja/about/">https://ibaj.or.jp/ja/about/</a>
日本国際バカロレア校連盟のサイトで、日本の IB 校のネットワークです。	

## 第9章 リソース・参考文献

IB 公式文書

①プログラム共通文書

国際バカロレア (IB) の教育とは

<https://www.IBo.org/globalassets/new-structure/brochures-and-infographics/pdfs/what-is-an-IB-education-ja.pdf>

プログラムの基準と実践要綱

<https://www.IBo.org/globalassets/new-structure/about-the-IB/pdfs/programme-standards-and-practices-ja.pdf>

②PYP 実践に関わる文書

PYP : 学習者

<https://www.ibo.org/globalassets/new-structure/about-the-ib/pdfs/ja-fr-principles-to-practice.pdf>

参考文献

- ウィギンズ, G., & マクタイ, J. (2012). *理解をもたらすカリキュラム設計: 「逆向き設計」の理論と方法*. 西岡加名恵 (訳). 日本標準.
- エリクソン, H. L., ラニング, L. A., & フレンチ, R. (2020). *思考する教室をつくる概念型カリキュラムの理論と実践*. 遠藤みゆき & ベアード真理子 (訳). 北大路書房.
- マーシャル, C., & フレンチ, R. (2024). *思考する教室をつくる概念型探究の実践*. 遠藤みゆき & ベアード真理子 (訳). 北大路書房.
- 中村純子 & 秋吉梨恵子 (編). (2024). *「探究」と「概念」で学びを育む! 小学校国際バカロレアの授業づくり*. 明治図書.

【筆者】

瀬端 淳一郎	山梨学院小学校
原田 卓	静岡サレジオ幼稚園・小学校
永留 聡	英数学館小学校